

智慧の念仏うることは

法蔵願力のなせるなり

信心の智慧なかりせば

いかでか涅槃をさとらまし

(『正像末和讃』真宗聖典五〇三頁)

法蔵願力のなせるなり

第19組 聖光寺住職

鍵主 俊明

text by Toshiaki Kaginushi

今年の9月末、女子中学生を誘拐し、2年に渡り監禁していた大学生の初公判が行われたとの報道があった。少女はインターネットで、両親が自分を探し続けていることを知り、公衆電話から自宅に電話をかけ無事保護されたということであったが、報道内容を見ると、もっと早く逃げ出すこともできたのではないかと思われた。両親の心配は計り知れない、なぜだろうか。

しかし私にも、自分の現在の思いを自分では否定し得ないであろう。少女は大学生に「私は捨てられた。帰る場所がない。」と復唱させられ思い込まされたそうだが、その思いの殻から動けずに、結果として両親の心配をよそに、全く訳のわからない二年間を過ごすことになってしまったのではなかろうか。そう考えたとき、それは私の姿でもあるのではないかと思われてきた。

楠信生先生は唯識を講ずる中で、「凡夫というのは自分が思ったら思った通りのものがあるのを凡夫というのだ。」という仲野良俊先生の言葉を紹介され、「向上心はその人間枠の中の話、求道心は人間枠を超える覚という世界を求めると言う。～凡夫というのは実存を失っている。」と言われているが、そ

の事が自覚できないまま、いたずらに日々を過ごしているという事である。

そうした自分の姿を知らされたように思う出来事がある。それは私が大学生の頃、寺で一人生活をしていた祖父に介護が必要になると、中学の教員だった父を含め、市内に住む子供達が交代で寺に泊まり込んでいた時の事。孫の私も休みには時々その役を担わされ、祖父の介護をしつつ泊まっていたのだが、早くに寝室へ行き眠りについたはずの祖父がある晩、襖二枚隔てた部屋でテレビを見ている私を、オーイと、何度も大きな声で呼んだのである。古い先短い祖父が暗闇の不安に耐えかねての声であろう、そう思った私はそばへ行き、「大丈夫、ここにいるよ」と声をかけると、祖父は再び眠りについたのだった。

それから25年以上を経て、その声が思いがけない形でよみがえった。それは昨年秋の彼岸、報恩講と、併せて勤める祖父母の年忌を十日後にひかえた夜だった。その時、父が彼岸会の法話で語った、「如来我となりて我を救いたもう」という曾我先生の言葉が思い出されていたからだろうか。十日後の法事でする挨拶のことが心配になり、意図して祖父母との記憶に思いをはせたとき、あの声は、私を案じて呼んでいたのではないだろうか、暗闇は自力の向上心を無自覚に生きる私の方ではなかったか、そう思われたのである。

宗祖には、「智慧の念仏うることは 法蔵願力のなせるなり 信心の智慧なかりせば いかでか涅槃をさとらまし」という御和讃がある。案じ続けた親の心が届き、少女を本来の世界へと帰らせたように、我々は名号を聞くことにおいて転ぜられ、即ち思いの殻が破れて自己に帰る。そこにはじめて「覚という世界」、「涅槃」を求めうる。それはひとえに、すでに案じ呼びかけて下さっていた法蔵菩薩の願いによることを述べておられるのである。